論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教 育 学　）	氏名	近山　和広
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

英語文法学習における多感覚アプローチの効果に関する実証的研究

論文審査担当者

主　　査	教　授	深　澤　清　治
審査委員	教　授	築　道　和　明
審査委員	教　授	松　見　法　男

〔論文審査の要旨〕

本論文の目的は，英語の文法学習に複数の感覚器官を使った多感覚アプローチを導入することで，視覚や聴覚といった単一器官を使って学習する場合よりも理解力が促進され，また学習内容が長期間保持できているのかを，日本人大学生英語学習者を対象に検証することである。

第 1 章では，本論文の目的と背景および論文構成について述べた。昨今，多くの大学生が以前に学習したいくつかの文法項目を正しく使えていない，または忘却してしまい，リメディアル教育の対象となっている。その問題の背景として，中学校や高校で適切な学習を行ってこなかった可能性を指摘した。

第 2 章では，本研究の目的に即して先行研究を概観し，問題の所在を明らかにしたうえで研究課題を提示した。第 1 節では，文法力とコミュニケーション力，および明示的指導と暗示的指導の比較を行い，日本の教育現場における文法指導観について述べた。第 2 節では記憶システムについて，情報や出来事はどのように記憶されていくのかについての説明を行った。第 3 節では，複数の感覚器官を使っての符号化について論じた。先行研究により，単一の感覚器官を使っての符号化に比べ，複数の感覚器官を使って符号化を行う方が，学習が促進され，記憶保持の効果があることが証明されている。このように複数感覚を使った多感覚アプローチは記憶と学習において効果的であるにもかかわらず，外国語の文法学習に応用している研究が少なく，記憶保持についても言及されていないという点を指摘し，第 4 節では研究課題を 3 点設定した。

研究課題(1): 運動感覚による符号化は，英語の文法の概念を学習するうえで効果があるのか。

研究課題(2): 多感覚アプローチによる学習は，英文の構造理解を助け，記憶保持効果を促進させるのか。

研究課題(3): 多感覚アプローチで符号化を行うと，情報が豊富になり，手がかかりを提示することで，検索が容易となるのか。

第 3 章では，研究課題(1)に対する実験を行った（予備実験）。運動感覚を使って分詞の概念を符号化することで学習者の理解が促進されるのかを，被験者実演課題の理論を援用した実験を実施し，分析を行った。その結果，分詞の概念を実演して符号化することで，

従来の視覚や聴覚のみからの符号化に比べ，理解が促進されることが明らかになった。

第 4 章では，研究課題(2)に対する実験を行った（実験 1, 2)。英語文法には，語順の変化などで，実演のみで符号化することができない項目が存在する。そのような文法の構文を理解し，長く記憶保持ができるのかを多感覚を活かしたアプローチとして木製ブロックを使用し，その効果を検証した。実験では分詞構文を扱った。その結果，多感覚を使うブロックで学習すると分詞構文の構文理解が促進され，記憶も長く保持されることがわかった。

第 5 章では，研究課題(3)に対する実験を行った（実験 3)。多感覚を使って符号化することで，思い出すことにも影響があるのかを符号化特定性原理を援用し，手がかり提示の有無で検証を行った。学習対象の文法項目は関係代名詞で，多感覚による符号化は前章と同じく木製ブロックが使用された。実験の結果，多感覚を使って符号化を行った場合，符号化時と近い環境を手がかりとして提示することで，思い出すことが容易になることがわかった。

第 6 章では，本論文の総合的考察と結論を述べた。本論文において，運動感覚を含む複数の感覚をとりいれた学習方法をとることで，これまで記憶に定着しなかった特定の文法項目の学習に効果があることが実証された。多感覚を使って学ぶことは，符号化できる情報がより豊富になり，同時にその経験は強く自己に結び付き，記憶される。このような記憶は，その学習した時の状況や環境を示す手がかりを提示することで思い出すことが容易になってくる。これまで，適切な学習方法がとられなかったことで記憶に定着しなかった英語文法も，多感覚を使った学習方法でより長く記憶保持され，あるきっかけで思い出しやすくなると示唆される。

本論文の独創性は以下の 3 点にまとめられ，学術的および教育的意義を評価することができる。

(1) 英語の文法力が低下し，リメディアル教育の対象となりうる大学生の救済策として，文法学習と記憶を結びつけた実践研究を実施したこと。
(2) 運動感覚と記憶や学習を扱う先行研究において，ほとんど扱われない外国語の文法学習に焦点を当て，指導法を提案したこと。
(3) 多感覚を使って，記憶に残るような英語の文法学習を目指した学習方法を探求し，教材の開発を行い，その効果を検証したこと。

英語の文法を正しく使えない，または忘れてしまう学習者が多く，リメディアル教育の対象となってしまうという英語教育の現状に対し，多感覚を使って記憶に残る学習方法を提案し，研究を行ったことは，今後，学習した英語の文法を長く記憶でき，必要な時にすぐに思い出し，その知識を使えるようにするという課題に貢献できていると考える。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 2 年 2 月 7 日